

# 分類学の父リンネの植物園

## ——ウプサラのリンネ・ガーデン——

札幌市 高橋英樹

スウェーデンの首都ストックホルムの北約70キロに古い大学街ウプサラがある。植物分類学の父リンネはウプサラ大学で長く教鞭をとり、ここで亡くなった。この街のやや北はずれに、彼の植物園リンネ・ガーデンがある。入口は簡素な門(図1)でうっかりすると通り過ぎてしまうほどで、全体でも100平方mほどの小さな植物園である。5月1日から9月30日まで一般に公開されている。

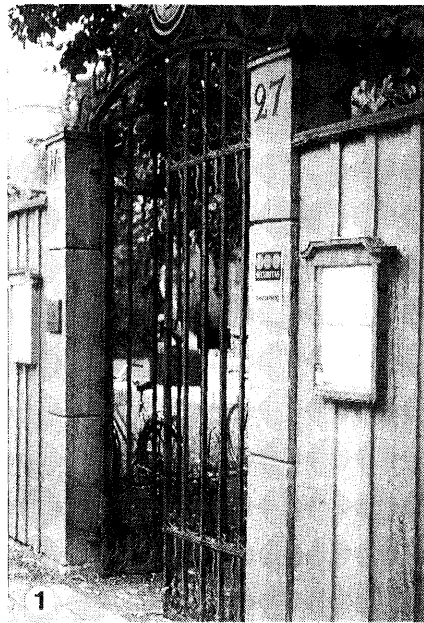
### 分類学の父リンネ

リンネは1707年5月23日にスウェーデン南部のスモーランド地方で生まれた。父は牧師だったが園芸学にも興味があり、リンネはその影響もあり、聖職よりも医学の道を選んだ——その当時は、植物学と医学は密接な関係があり、学問分野としても二つには分化していなかった。スウェーデン南部の Lund 大学に入るが、一年でウプサラ大学に転じ、そこで植物学者ルドベックに才能を認められた。1735年にはオランダに渡りそこで、「自然の体系 *Systema naturae*」を著わし、動・植・鉱物の3界の体系化を試みた。ここで彼は植物界を体系づける方法、24綱分類を発表した。この方法は花の雄しべの数や位置・構造を主体として24のグループ(綱)に分けるため、セクシャル・システムとも呼ばれた。1741年ウ

プサラ大学の教授となり、このリンネ・ガーデンの一隅に移り住み、ここで植物の研究を進めた。1753年にはあの有名な「植物の種 *Species plantarum*」を出版した。植物の学名がこの出版物を出発点としていることや、ここで採用された2名法が現在でも学名の付け方の基本となっていることは、よく知られている。

### リンネ・ガーデンの歴史

現在のリンネ・ガーデンはもともと、1655年頃オロフ・ルドベックが大学植物園として整備したことに始まる。その当時1870種類の植物が植えられ、ほぼ3分の1は外国産の植物だったと言われるのだから、相当のものである——但しこの数は種数を正確に示したのではなく、色変わりなどの多数の品種を含んでいたと考えられている。その後、18世紀初頭になると1702年のウプサラ大火による影響もあり、荒廃しはじめ、1720年代には300種もないような状態となった。リンネは1729年の春に始めてこの植物園を訪れているから、丁度この頃である。ここで植物研究を始めたリンネはオロフ・ルドベック(同名だが植物園を創設したルドベックの子供)に認められる。これがリンネのセクシャル・システムを作る出発点となった。1741年に教授になると、この植物園充実に乗りだし、面積を田



1



2

来の2倍にし、オランジェリー（温室の一種）も建設した。リンネの名声に世界各地から植物が集まり、約3000種にまで増えた。リンネはここで生きた植物を観察し続け、その成果は彼の著書として結実していく。しかし、植物園の維持管理は大変だったようで、特にオランジェリーの維持には苦慮し、晩年には彼の体力の衰えと共にガーデンも衰退していく。

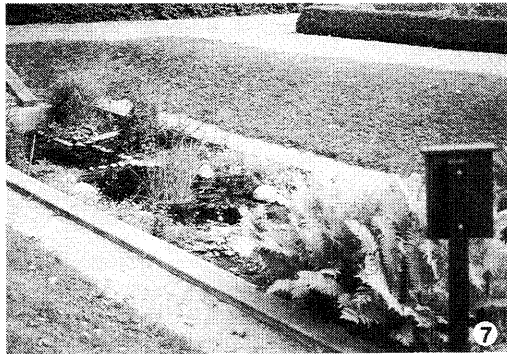
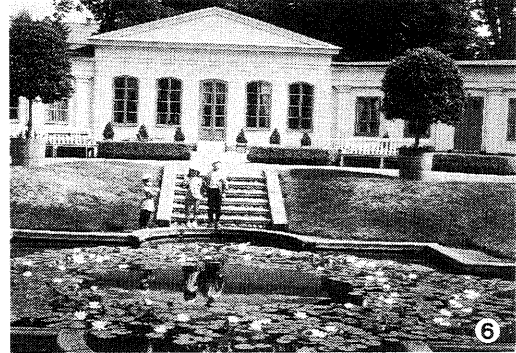
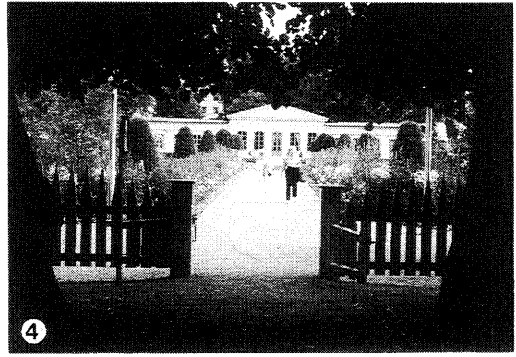
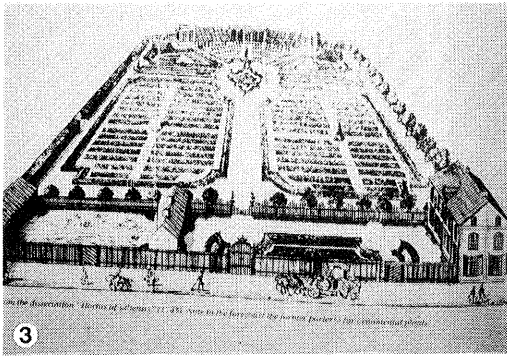
1778年リンネが死ぬと、息子の小リンネ、続いてツェンペリーが後を継ぐが、もともとの地が湿りすぎていて植物の栽培に適さなかったこと、グスタフ3世が宮殿の庭園を大学植物園としてウプサラ大学に寄付したことにともより、リンネガーデンは荒廃し、単なる公園となってしまった。

しかし1917年スウェーデン・リンネ学会が創設されると、このガーデン復興の事業が始められた。そして1950年代にはリンネの住居やオランジェリーも修復された。現

在では1学会が運営するには負担が重すぎるとの理由で、ウプサラ大学の管理下におかれており、実際には大学植物園で植物の管理はおこなわれているようである。

### リンネ・ガーデンの植物と配置

植物園は入口をはいると前庭となっており、右側にはリンネ一家が暮らした家（現在は博物館として公開されている）、左側には若かりし頃のリンネの像（図2）がある。全体としては18世紀当時（図3）を再現するよう工夫されている。前庭を過ぎると正面にはオランジェリーが見え、真ん中の道をはさんで庭は左右対象の配置となっている（図4）。左右それぞれはトウヒの生垣で大きく区切られており、右側は一・二年草の分類花壇、左側は多年草花壇の区画となっており、植物はもちろんリンネの24綱分類に従って配植されている。植物に付けられたラベルには24綱分類による番号が



ふってある(図5)。現在リンネの24綱分類は人為分類として、通常受け入れられていないので、このようなラベルはここ以外の植物園では見られないという事になる。

さらに真ん中の道を進んでいくと、池(図6)がある。そしてその左右には四角いプールがあり、左は川を再現し(図7)、右側では湿地を再現している。つまりここでは水環境に関連した生育地の違いがみごとに表わされている。ここまでの道の両側に沿っては18世紀当時普通に見られた鑑賞植物が植え込まれている。さらにオランジェリーのすぐ手前向かって右側には秋咲きの草本花壇が、左側には春咲きの草本花壇があり、ここでは開花期の違いが表現されている。

現在、全体としては1300種が植えられており、その内約1000種が分類花壇に植えられている。

この植物園はリンネの世界観を植物をとおして表現した庭ともいえよう。雌雄性という生物の基本にかかわる性質で体系づけた区画、生育立地の違いつまり空間により体系づけた区画、そして開花期の違いを表現した時間による区画がみごとに調和して配置されている。生物は空間的・時間的存在であることがこの庭をみることであらためて実感できるのである。

なお正面の建物は昔のオランジェリーを修復したものだが、当時のガラス製の温室部分はなく、植物栽培用には使われていない。現在では、オランジェリーの前庭部分で開店される喫茶店の厨房として、また日

の長くなる夏の夜には小さなコンサートが開かれたりして(図8)市民の憩いの場となっている。

## 参考文献

Broberg, G., A. Ellenius & B. Jonsell . 1983. *Linnaeus and his garden*. Swedish Linnaeus Society, Uppsala. 48 pp.

## 図の説明

- 図1、リンネ・ガーデンの入口。鉄製の扉があり、住所は *Svartbäcksgatan 27*。
- 図2、入口はいつてすぐ左にある、若かりし頃のリンネ像。像の足元に見えるのはリンネ時代にあったと推定されているポプラの切り株。
- 図3、「ウプサラ植物園 *Hortus upsaliensis*」(1745)中に描かれている、18世紀当時のリンネ・ガーデン。
- 図4、入口より園内を望む。正面にオランジェリー、左右には分類花壇がある。
- 図5、分類花壇に植え込まれているセイヨウオオバコ (*Plantago major L.*)。ラベルには第4綱(ローマ数字で書かれている)に属することが示されている。つまり4本の同長の雄しべがあるグループである。そのあとのアラビア数字はさらにその綱内の日(*order*)の番号を示す。
- 図6、オランジェリーの前のスイレン池。
- 図7、川を再現したプール。
- 図8、夏の夜、オランジェリーで開かれたコンサートの後、分類花壇を散策する人々。既に夜の9時を過ぎているが、まだ明るい。